大津歴博だより

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

2025
No.
138

contents

企画展 瀬田国民学校絵日記 P1～P3 －戦時下の学校生活と子どもたち－

新収蔵品紹介 一番弟子と師の揃い踏み P4 －新収蔵品における勝川春好と勝川春章－

新収蔵品紹介 電話でつながった歴史資料の寄贈 P5 －岡本家永代帳と日の丸の寄せ書き－

収蔵品紹介 柴田晩葉の「十二ヶ月花鳥図」 P6 －異種スタイル混在のセット物作品－

大津市歴史博物館
令和７年６月13日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2
TEL(077)521-2100
https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

企画展 瀬田国民学校絵日記
－戦時下の学校生活と子どもたち－

会期：令和7年7月19日（土）～8月31日（日）

昭和 19 年 4 月 5 日　入学式・始業式の日

昭和 19 年 4 月 6 日　学習園での作業

昭和 19 年 12 月 18 日　警戒警報後の帰宅のようす

昭和 20 年 2 月 15 日　警戒警報と空襲警報が続く
「私たちは勉強と戦争をしている」とある

瀬田国民学校絵日記（大津市指定文化財）本館蔵

戦争の時代を描いた子どもたちの記録

大津市の有形文化財（歴史資料）として指定されている資料に、「瀬田国民学校絵日記 昭和十九年五年智組」があります（2016年3月15日指定）。これは、昭和19年（1944）4月から昭和20年（1945）3月にかけて、瀬田国民学校（現在の大津市立瀬田小学校）五年智組の女子児童たちが絵と文章でつづった学級日誌です。太平洋戦争が激化していく時期の学校生活が、子どもたち自身の言葉で記されています。戦時下の学校での授業や行事のようすと、当時の瀬田の子どもたちがどのように暮らしていたのかがわかる貴重な記録といえます。

絵日記は、昭和19年4月5日の入学式と始業式の日から始まり、昭和20年3月19日の卒業式前日、年度修了の目前で終わります。全部で188日分（月ごとの表紙などを含めて総数197枚）が書かれました。日々の授業に真剣に取り組む姿や、遠足、運動会、学芸会などの行事が楽しみなようすがのびのびと記される一方で、出征兵士を見送る壮行会、食料増産の作業、大詔奉戴日の行事（真珠湾攻撃後、毎月8日を国民の戦意高揚の日とした）など、戦時下での出来事が数多く見られます。また、日記の端々には、「私たちは決戦下の少国民として一生けんめいに勉強してお国のためにつくします」、「兵隊さんに負けないようにがんばりましょう」などの決意表明といえる言葉がくり返し出てきます。

さらに、昭和20年に入ると、日記には敵国への憎しみを表す言葉、厳しく勇ましい言葉が増えていきます。戦況の悪化に子どもたちが翻弄されていくようすが切実に記されているといえます。

絵日記が描かれた背景

この絵日記を書くことを指導したのは、五年智組の担任、西川綾子さんでした。大正6年（1917）生まれの西川先生は、昭和11年（1936）に滋賀県女子師範学校を卒業した後、瀬田校に赴任します。そして、昭和19年4月から新しく担任となった五年智組で、学級日誌としての絵日記を書くことを提案しました。クラスの中から絵や文が得意な7人を選び、絵日記を担当させました。筆者である当時の五年智組の方々の回想によると、毎日1枚の紙をもらって、今日は何を書こうかと当番の子ども同士で相談し、放課後の1～2時間程度で書きあげていたといいます。西川先生は、内容については子どもたちの自由にまかせて、訂正をすることもほとんどなく、「よく書けたね」とほめてくれたそうです。

五年智組在籍児童の集合写真
前列の中央左が矢嶋校長、中央右が西川先生

西川先生自身は、2008年に龍谷大学瀬田学舎で開かれた講演で、子どもたちに絵日記を書かせた理由として、4つの観点をあげました。1つ目は、当時の矢嶋正信校長の影響です。矢嶋校長は「土に親しむ教育」を推進し、総合教育を重視して熱心に取り組んだ、当時としてはとても先進的な教育者でした。2つ目は、子どもたちの表現力を育てることです。ラジオも新聞も戦況ばかりを報道する中で、感性豊かな5年生の女の子たちに、文化、芸術、表現力を与えたいと考えたのです。3つ目は、彼女たちが大人になった時に絵日記を見て当時を思い出し、友情をさらに深めてほしいということ。4つ目は、当時の学童たちがどのような生活と教育の中で成長したかを、後世に理解してもらいたいという思いからでした。

戦時下の学校生活というと、抑制された厳しいものであったと想像しますが、この絵日記に見られる子どもたちのある種の明るさやのびやかさは、このような背景から生まれたのです。ただし、子どもたちは本当に何でも自由な気持ちを書いたというわけでもありません。筆者の方々は、当時を思い起こして、戦時下の不安な思いや、この戦争には負けるだろうと感じていたことを後に語っています。しかし、そのような表現は絵日記の中には見られません。学級日誌として共有するための絵日記であったことから、書いて良いことと書いてはいけないことの選択を子どもたちなりに、おこなっていたのでしょう。

これまでの展示と修理事業

書きあげられた絵日記は、月ごとに綴じて教室の後ろに保管し、クラスの皆が読めるようになっていたそうです。

そして、戦後は西川先生の手元で長く保管されていました。西川先生は、戦後も大津市内の小学校に勤め、その後は市教育委員会の指導主事を務めます。これは歴史博物館の開館前で、『新修大津市史』編さん時の調査記録を見ると、昭和53年（1978）3月7日に「西川綾子氏より資料借用（14日返却）」とあり、市史編さん室が一時的に預かったことがわかります。西川先生は、この時のことについて、自身が市教委で働いていた際にちょうど学芸員が調査に訪ねて来ることがなければ、この絵日記は永久に自宅の部屋に保存されたままになっていたかもしれず、「数奇な運命」であったと回想されています。その後、改めて当館へ寄贈いただきました。

また、絵日記の筆者の皆さんの地元でもある南大萱では、『南大萱史』（2004年刊）に絵日記を取り上げ、これ以降、南大萱資料室で「戦争の記憶展」としてパネル展を続けています。さらに、龍谷大学国際文化学部教授であった吉村文成氏が絵日記に注目し、調査と内容の公開を進められました。吉村氏が監修した『1944～1945年 少女たちの学級日誌 瀬田国民学校五年智組』（2015年、偕成社刊）には絵日記全点の内容が収録されています。

絵日記の実物資料は、過去の企画展で一部を展示してきましたが、全体として経年変化による傷みが大きく、今後の安全な展示活用が難しい状況でした。このため、令和5年度に保存修理事業をおこない、全点の修理を実施しました。今夏の企画展では、この修理後の姿を初めて全点公開します。

絵日記に描かれたできごと

さて、1頁目にも掲載した絵日記の内容について、さらにいくつかを紹介しましょう。

昭和19年5月30日は、前日に学習園で収穫したえんどう豆の試食会のようすが書かれています。試食会の話題は、この後も何度か登場します。どの日も文章は長めで、特にこの30日は準備をする様子も絵で細かく表現されています。文には「うれしくてうれしくてうれしくてたまりません」とあり、食べ物の乏しい時代の中で、子どもたちが試食会をとても楽しみにしていたようすが伝わってきます。

6月8日は麦刈りの季節で、学校での草刈り作業中に、通りかかった水兵さんに向かって元気よく「ばんざいばんざいばんざい」と手を振っています。また、この日は文章の最後に「私たちはお手伝いにはげみ、今にルウーヅベルト（当時のアメリカ大統領）をやっつけよう」という言葉が入っています。通りかかった兵隊を万歳で見送るようすは他の日にも描かれており、日常的な光景であったことがわかります。

昭和19年夏には、都市部からの学童集団疎開が始まりました。瀬田では大阪・浪速津国民学校の児童を受け入れています。8月22日には、スカートをはいた「疎開の子」ともんぺ姿の「瀬田の子」が描かれています。

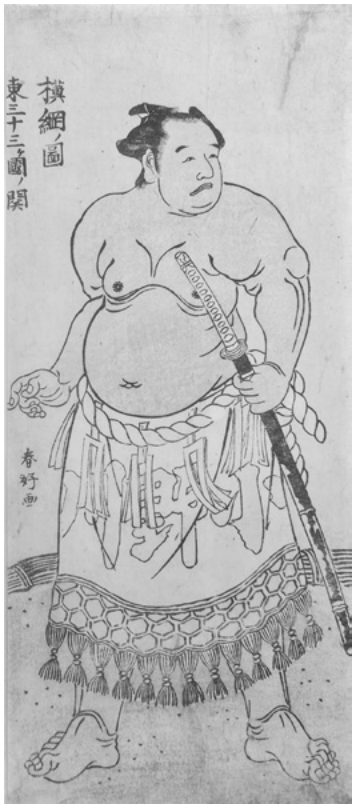
昭和20年になると、瀬田への直接的な爆撃はなかったものの、都市部へ向かう敵機が通過し、警戒警報と空襲警報が頻繁に発令されるようになりました。大規模な空襲による悲惨な状況を、子どもたちも聞いていたようです。1月19日には、空襲警報を聞いて防空壕に避難した後に飛来したB29を目撃したようすが描かれ、「にくいにくいB29　今にみていろこの戦」という厳しい言葉が書かれています。また、この絵日記の最後の日、3月19日には、真っ黒に塗りつぶされたB29と「にくらしきB29　今に見ていろこの戦」とあります。戦況の悪化は、少女たちにも過激な言葉を書かせるようになっていました。絵日記はここで終わり、この後、智組の少女たちは6年生になり終戦を迎えました。

一部のみを紹介しましたが、今夏の企画展では、現代語訳や用語解説ともに1年間の絵日記を日付順に全て展示し、戦時下の学校生活と子どもたちの暮らしをたどります。

（学芸員　福庭万里子）

令和６年度の新収蔵品から（絵画資料）

一番弟子と師の揃い踏み －新収蔵品における勝川春好と勝川春章－



【写真１】
横綱ノ図 小野川 勝川春好画

令和６年度、当館としては珍しい画題の浮世絵版画（写真１）を購入しました。タイトルは「横綱ノ図　小野川」。大津が生んだ大横綱、小野川が太刀を携えて威風堂々とした土俵入りの姿です。江戸中期の横綱の土俵入りを浮世絵師の勝川春好が描いた、いわば当時の人気アスリートのブロマイドと言える浮世絵版画です（当時何作もの浮世絵版画に小野川は登場します）。

巨軀ではないものの、肩から腕にたくましい筋肉をみせ、太い脛と大きな足で仁王立ちする小野川が締める注連縄（綱）が細くて意外です。綱の奥に独特な御幣を下げ、前垂は大字で「小野川」と表し、名馬のたてがみ風に馬簾を結ぶ点等、当時の横綱化粧廻しの特徴を知ることができます。

彼は宝暦８年（1758）もしくは宝暦11年（1761）、大津の京町に川村喜三郎として生まれ、初代小野川才助の養子となりました。安永６年（1777）には江戸相撲に進出して二段目（現代の十両相当）の筆頭に番付され久留米藩お抱えとなり、藩の上屋敷内に小野川部屋を開きます（現在も年寄名跡として存続）。

そして、天明２年（1782）、63連勝中であった大関谷風を二段目の小野川が破る金星をあげ（大田南畝も狂歌で喝采）、以後、谷風とは名勝負を繰り広げ、将軍の上覧相撲の機運が高まります。寛政元年（1789）の11月場所で吉田司家から谷風と共に横綱免許を授与され（横綱制度の始まり）、同３年６月、回向院で上覧相撲が開催、将軍家斉の要請により小野川・谷川戦が組まれたのでした。そして同９年10月場所で引退。幕内通算成績は144勝13敗４分10預。現代では信じがたい勝率です。スーパー横綱のブロマイドを入手できた歴史博物館は、小野川にあやかって験を担ぐことができるでしょうか。

ちなみに、本作を描いた春好の師、勝川春章こそが相撲絵の確立者であり、やはり小野川を描いています。彼の仕事の大半は役者絵・相撲絵・美人画が占めていましたが、その春章が誠に上品な近江八景図を描いていたことは意外と知られていません（現存数が少ないゆえ）。写真２の作品は安永年間（1772～81）頃の作と思われ、当時、多色摺り木版画による近江八景作品はほぼ流通しておらず、斬新な近江八景でした。一方で趣向は古風で、画帖に貼付ける切り抜き型色紙（雪輪・団扇型・円窓・扇面型）に見立てた窓に情景を描き、拓本帖のように墨色で地つぶしした余白には、玉質宗樸（円光寺二世住持）が慶安４年（1651）に撰した計16首の七言絶句「江州八景」（『點驢集』収録）のうち石山秋月の第二首が、唐様の書風で白ヌキされています。通常、近江八景画は近衛信尹の近江八景和歌を伴いますが、本作は、玉質の七絶で近江八景を紹介した往来物『童習教訓万福往来』（享保年間［1716～36］頃）等の影響を受けたのかもしれません。上品な色摺りと相まって、教養を感じさせます。なお本館では、図版の石山の秋月ほか、勢田の夕照、粟津の晴嵐、堅田落雁の四景を収蔵しました。

【写真２】
近江八景 石山の秋月 勝川春章画

令和６年度には、他にも「大津絵　阿弥陀三尊来迎」、「大津絵画巻　中嶋来章筆」を購入しましたが、これらは企画展「れきはくの大津絵」（９月27日～11月９日）にて展示いたしますので、ぜひご覧ください。

（学芸員　横谷賢一郎）

令和６年度の新収蔵品から（古文書・歴史資料）

電話でつながった歴史資料の寄贈 －岡本家永代帳と日の丸の寄せ書き－

当館のコレクションといえば、真っ先に大津絵や近江八景を思い浮かべる方が多いかもしれません。もちろんそれらは開館以来、重点的に収集している絵画資料ですが、大津の各地域の古文書・歴史資料も多く収集しています。

令和６年度には、新たに２件の古文書と４件の歴史資料を受け入れました（購入１件・寄贈５件）。このうち、寄贈品の２点について、収蔵することになった経緯を備忘録として少し紹介しておきたいと思います。

１点目の「岡本家永代帳」（写真１）は、大津代官与力岡本家に関わる家譜（家の記録）で、江戸時代後期から現代までの内容が記されているものです。ある日、県外から一本の電話が入りました。お話によれば、自宅に過去帳のような資料があって処分しようと思っているが、もともと先祖が大津に住んでいたので、歴史博物館でお役に立つかもしれないのでお送りしようと思っている、というものでした。通常、過去帳であれば個人情報に類するものですので、お断りするのですが、内容をお尋ねしていくと、どうも過去帳ではなさそうでした。内容によってはお返しすることもありますが、と申し伝えて受話器を置きました。

後日、資料が到着し箱を開けてみてびっくりしました。とても分厚い帳面で、江戸時代からの情報が書かれてありました。しかも、表紙見返しには大津代官同心の名前が列挙してあり、結論から言えば、岡本家は大津代官同心組の一人で、山役（山林管理）や饗応関係（要人対応）の役を務めた家であったことがわかりました。これは単なる家譜という性格を越えて、大津代官関係資料として評価できる貴重な歴史資料である、と判断できました。その後、お電話で寄贈者の方から追加の情報をお聞きし、無事に寄贈をお受けすることになりました。

【写真１】岡本家永代帳

【写真２】日の丸寄せ書き

さて、もう１点は太平洋戦争出征時の日の丸の寄せ書きです（写真２）。ある日、筆者が館外に出ていた際、寄贈希望の方（市外の方）が資料を直接持って来館されましたが、担当者不在ということで受付係が写真だけ撮らせていただきました。筆者の帰館後、写真を確認し、翌日にお電話を差し上げました。そこでお伺いした話は次のようなものでした。仏壇を整理していると、日の丸の寄せ書きと軍人勅諭集などが出てきたので処分も考えているが、何かしら博物館の方でお役に立てるのであれば、と。

後日、再びお越しいただき、寄せ書きに書かれている出征した森本孝一さんは伯父さんに当る人（次男）で、終戦直後の８月24日に戦地の病院で22歳で亡くなっており、その兄もレイテ島で23歳で戦死したことをお伺いしました。寄贈者は三人兄妹の長女のご子息であり、その関係で仏壇に残っていたのだろうと教えてくださいました。なお、なぜ当館に資料をお寄せいただいたのかお尋ねすると、孝一さんは昼は大津市職員として働き、夜は立命館大学の夜間部に通われていたそうで、寄せ書きには当時の市長や職員の名前が見え、そのゆかりでということでした。

当館ではすでに出征時の日の丸の寄せ書きを数点収蔵しています。同じものを収蔵すると捉えることもできるかもしれませんが、歴史資料としては唯一無二のものです。大津に関わる歴史資料であり、お断りするという選択肢はありませんでした。このように、寄贈の際には詳細な聞き取りを通じて、資料の内容や伝来をお伺いし、その歴史情報も一緒に博物館資料として後世に伝えることが重要と考えています。今後も資料だけでなく、記憶や想いも残す作業を進めていきたいと思います。

（学芸員　高橋大樹）

収蔵品紹介

柴田晩葉（ばんよう）の「十二ヶ月花鳥図」－異種スタイル混在のセット物作品－

本作は大津市新町出身の日本画家、柴田晩葉（1885～1944）が12ヶ月の四季花鳥を12点セット（12幅対）の掛幅（掛軸）として描いた作品で、各々の月を単独でも鑑賞できる花鳥画です。かつて平成22年度に、本館企画展「柴田晩葉－湖国のモダン日本画家－」にご出品いただいた作品であり、ケースにずらっと12幅が並び、月ごとに変化する花鳥の風情を鑑賞されたご記憶のある方がいらっしゃるかもしれません。

このスタイルには前例があります。江戸琳派として著名な酒井抱一による「花鳥十二ヶ月図」（皇居三ノ丸尚蔵館蔵）です。したがって、本作には師の山元春挙ゆずりの近代写生画法と琳派風の表現（花見月は中村芳中風、早苗月は尾形光琳風、神無月は酒井抱一風など）、さらに一部には近代琳派風な趣向も同居しています。なお、晩葉は本作以前の大正３年（1914）時点で、すでに琳派風の屏風作品「四季草花図」（大正３年、上記企画展図録13）を手掛けており、琳派の表現に傾倒していたことが分かります。

ちなみに本作は６箱の桐箱に分納されており、以下のように、いずれの箱にも各月の画題と署名が箱書きされる共箱となっています。そして、最後の11月・12月の箱蓋（はこぶた）の裏には大正９年の年紀が墨書されています。

１月：初空月、　２月：梅見月、３月：花見月、
４月：卯の花月、５月：早苗月、６月：水無月、
７月：文月、　８月：葉月、　９月：夜長月、
10月：神無月、11月：神楽月、12月：春待月

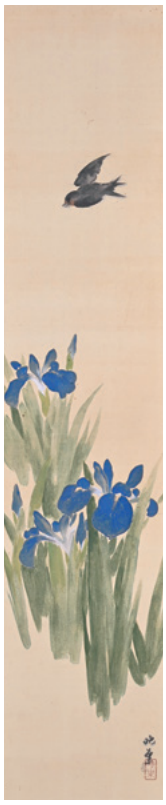
参考までに、ご寄贈者の旧宅は、膳所中庄の春挙の別邸、蘆花浅水荘からほど近い旧膳所市街に所在し、春挙の甥で同じく日本画家の疋田春湖の邸宅からも近いお宅です。山元家や門人達との交流のなかで柴田晩葉に発注された作品なのかもしれません。

（学芸員　横谷賢一郎）

柴田晩葉（1885～1944）

京都市立美術工芸学校研究科を明治41（1908）年卒業後、京都市立絵画専門学校２期生として同45年に修了。その後、山元春挙に入門。大正時代の幕開けとともに画壇に登場した。当時の最先端の美術モードから影響を受けたモダンな作品を手がける一方、牧歌的で詩情にあふれた作品も制作した。官展では、第６回・８回・10回・12回文展および第８回・第12回帝展に入選。

3月


5月

7月

8月

9月

11月

十二ヶ月花鳥図（一部）　柴田晩葉筆